

# 保育者養成校における ピアノ初級者のための鍵盤遊びに関する一考察

西路 優佳

キーワード：保育者養成、ピアノ初級者、鍵盤遊び、鍵盤感覚、音の循環

保育園や幼稚園での幼児の生活には音楽が大きな役割を担っており、歌の時間はもちろん、そのほか登園時やお片づけ、運動時、季節のイベントなどで、音楽は常に欠かせないものになっている。そのため、保育者には音楽に対する様々な知識や力が求められる。なかでも、ピアノを使って童謡などを弾き歌いしたり幼児の歌や動きに合わせて伴奏したりする技術は必須である。しかしながら昨今、保育者養成校ではピアノを弾くことにあまり慣れていないピアノ初級者の学生が入学する割合が高く、ピアノに対する学生の困り感は大きい。筆者はピアノに不慣れな学生にとって、ある程度の鍵盤感覚を養いながら鍵盤に慣れる必要があると考えた。鍵盤に慣れることで、将来的に幼児のほうを向いたままピアノを弾くこと、弾きながら歌や子どもの状態にも気を配ることが望める。

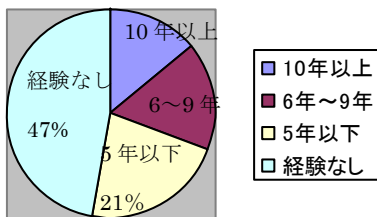
筆者はピアノの鍵盤に指を慣らすことに着目し、ピアノ初級者が親しめるような鍵盤遊びを考え、授業の導入に取り入れ、それを基に考察した。

# I はじめに

## 1 ピアノ初級者の割合と学生の実態

今年度、本学において幼児教育学科に入学した1年生のうち、ピアノ初級者（経験なし）の割合は47%と約半数に及ぶ（右表参照）。また、ピアノ経験者のうち経験年数が5年以下の者の割合は21%と次いで多く、その殆どは小学生の時に習っていた以来でブランクがあった。

【今年度の入学者のピアノ経験の割合】



これまで本学では、ピアノテキストの見直しやアクティブ・ラーニングの導入などで、学生のピアノのレベルは少しずつ向上してきている。筆者は、学生の更なるレベルアップのための改善策を見出すべく、4月当初、1・2年生14名の学生にピアノに関する意識調査（資料1）を行い実態や困り感を探った。まず調査の結果、（1）ピアノを弾くことに対する気持ち（2）ピアノを弾き歌いすることに対する気持ち（3）一日に向かう練習量の3点に着目した。

(資料 1)

ピアノに関する意識調査

これまでのピアノ経験        年 性別        男・女

1. 音楽全般に対する気持ち (聴く・奏する問わず)  
A とても好き    B やや好き    C どちらでもない    D やや嫌い  
E とても嫌い
2. 自宅にピアノはありますか (種類に○をつける)  
A ある (グランドピアノ・アップライトピアノ・電子ピアノ)    B ない
3. ピアノを聴くことに対する気持ち  
A とても好き    B やや好き    C どちらでもない    D やや嫌い  
E とても嫌い  
(その理由: )
4. ピアノを弾くことに対する気持ち  
A とても好き    B やや好き    C どちらでもない    D やや苦手  
E とても苦手  
(その理由: )
5. ピアノを弾き歌いすることに対する気持ち  
A とても好き    B やや好き    C どちらでもない    D やや苦手  
E とても苦手  
(その理由: )
6. 普段、多いときで一日どのくらい練習に向かっていますか  
A 2時間以上    B 1時間以上2時間未満    C 30分以上1時間未満  
D 15分以上30分未満    E 15分未満
7. 普段、少ないときで一日どのくらい練習しますか  
A 2時間以上    B 1時間以上2時間未満    C 30分以上1時間未満  
D 15分以上30分未満    E 15分未満  
F 全く練習しない日が週の半分以上

設問は以上です

ありがとうございました

【調査結果】

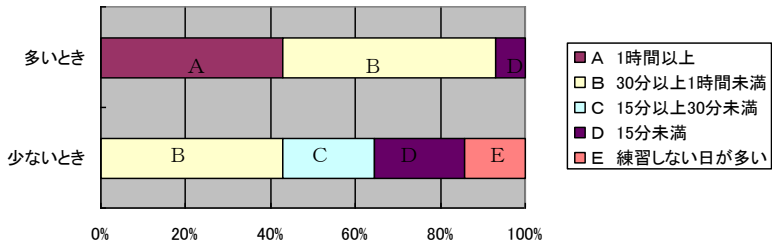
(1) ピアノを弾くことに対する気持ち

とても好き 4人／やや好き 6人／どちらでもない 1人／  
やや苦手 1人／とても苦手 2人

(2) ピアノを弾き歌いすることに対する気持ち

とても好き 2人／やや好き 5人／どちらでもない 2人／  
やや苦手 5人／とても苦手 0人

(3) 一日に向かう練習量



調査結果(1)から、〔とても好き〕〔やや好き〕合わせて10人で、調査対象の学生の中ではピアノを弾くことが好きな学生のほうが多いことが分かる。個別に見ると、「楽しいし、つらいことを忘れられる」「弾けなかったところが弾けると嬉しい」といった前向きな理由が挙げられていた。〔苦手〕と答えた学生の理由は、「なかなか指が動かない」「両手弾きを覚えるのが遅い」というもので、〔やや好き〕と答えた学生からも「演奏することは好きだが、技術が伴わない」「まだあまり慣れていない」といった、ピアノ経験の浅さや技術面を気にする声が多かった。

調査結果(2)では、〔とても好き〕〔やや好き〕と〔どちらでもない〕〔やや苦手〕が半々に分かれていることから、ピアノをソロで弾くよりも弾き歌いのほうが

苦手意識のある学生が多いことが分かる。その理由として、学生からは「弾くことに集中してしまい、声が出せない」「同時にできない」「どちらかに集中すると、どちらかが間違えてしまう」といった声があり、ピアノと歌を両方やることに対する困り感が多かった。また、〔とても苦手〕が（１）では２人いたのに対し（２）では一人もおらず、弾くことが苦手でも歌が入ることで救われる学生もいることも分かった。

調査結果（３）からは、ほとんどの学生は多い時で一日 30 分以上練習時間を確保している反面、少ない時は一日 15 分前後しか練習できていないことや一週間のうちに全くピアノに触れていない日のほうが多い学生も一定数いることが分かった。個別に見ると、ピアノが苦手と回答した学生のほうが練習時間は短い傾向にあり、好きと回答した中にも毎日練習しない学生のほうが多いことも明らかになった。

上記の結果をふまえて学生の困り感の中から筆者は、ピアノ経験が浅いことで指がピアノの鍵盤に慣れておらず弾きにくいこと、の一つに焦点を当てることにした。本学においては卒業まで 2 年間という短い期間しかなく、その後は現在ピアノ初級者の学生たちも保育現場で幼児を前にして、童謡などを弾き歌いしたり、幼児の歌や動きに合わせて様子を見ながらピアノを弾いたりすることになるため、早いうちに鍵盤に慣れておく必要がある。鍵盤に慣れるためにはたくさんピアノに触れることが大事なので、本学のカリキュラムは現場で使うことのできる童謡の弾き歌いを何曲も課題として与えることで、学生の練習する環境につなげている。しかし、先程の調査結果（３）のようにピアノが苦手と思うほど毎日練習しなかったり、多忙で練習できなかったりなどの現状があり、その分鍵盤に慣れるまでには時間がかかってしまう。

そこで筆者は、楽曲練習以外のアプローチとして学生がピアノを使って遊ぶ時間をもつことで、楽しさを感じ、ピアノという楽器そのものに興味関心をもち、指が鍵盤に早く慣れるように導きたいと考えた。授業の導入で鍵盤遊びを取り入れて、学生の様子を観察しながらその可能性を探ることにした。

## 2 鍵盤遊びについて

成長してからピアノを始めると、目の前の楽譜にとらわれてつい楽譜どおりに弾くための練習になり、ピアノで自由に遊んでみるということをする人のほうが少ないと思う。しかし幼少期からピアノ経験のある人は少なからず、鍵盤を意味なく叩いて音を楽しんだり、練習曲でないものを弾いたりしたことがあるのではないか。筆者は幼少期に様々な鍵盤遊びをした。思い出せる遊びを少し挙げてみると、救急車のサイレンやCMソングなど耳で聞いた音や音楽をピアノで再現してみたり、鍵盤の上に赤いカバーを敷いたままその上から曲を弾いてみたり、目を瞑って弾いたり、椅子に前後ろ逆に座って鍵盤を触ってみたり、カエルのうたなどの簡単な童謡を数人で輪唱するように一人で追いかけてこしながら弾いたりなどがある。こうして振り返ると、遊びながらも鍵盤と向き合い、こうしたらもっと面白くなるんじゃないかと子どもながらに色々考え、それがピアノに慣れる時間にもなっていたように感じる。それなら、たとえば大人からピアノを始めたとしてもこういう遊びの時間は必要で、鍵盤に指を慣らすための良い機会ではないだろうかと考える。

もちろんピアノを弾く以上、楽曲を何度も繰り返し弾いて練習することは大切で、そこから集中力や根気、忍耐力も向上し、うまく弾けたときには喜びや達成感を感じられるが、たどり着くまでにしんどくなったり煮詰まったりする。そんな時、鍵盤遊びのようなピアノに向かいながら気分転換できる術をもっていると、また新しい気持ちで再び練習に臨めたり、その間もピアノから離れずに時間を使うことができたりもする。

また、鍵盤遊びは力まずピアノに向かえるという利点もあると思う。特にピアノ初級者の学生は楽曲に臨む際、譜読みに時間がかかるので音符で頭がいっぱいになってしまったり、とにかく音を間違えないように指や腕、肩、背中など身体をガチガチに固めたままの姿勢で弾いたりしていることが多い。そして弾き終わってホッとしたときに、力がぬけて肩が下がり表情も柔らかくなる。ピアノを弾くときに適度な緊張感をもつことは大事だが、固くなりすぎると弾

きづらく、いつの間にか身体のあちこちが痛くなってしまう。逆に弾き終わってからの力が抜けた状態から始めると、とても楽に弾けて、音色も良くなる。そういったリラックスした状態を作り出すためにも、特に気負う必要のない鍵盤遊びは一定の効果があるのではないかと期待した。

### 3 鍵盤感覚と音の循環

授業で学生の様子を見てみると、新しい曲を譜読みするときには、だいたいの人が楽譜に書いてある音符と鍵盤上の指を合わせるために、目を楽譜と鍵盤交互に行ったり来たりさせて確かめながら弾いている。それが、譜読みが終わり曲を覚えてくると、ほぼ楽譜だけを見てすらすら弾く学生と、楽譜と鍵盤を見比べたり鍵盤を凝視したりして曲の途中で止まりながら弾く学生に分かれてくる。前者は鍵盤感覚をつかんでいると言える。

「鍵盤感覚」とは、手元を見なくてもピアノが弾けることをさす。目は使わずに、指の感覚で鍵盤の幅や場所をある程度把握できるのである。例えば、ド→1オクターブ上のドに移動するときでも、ドミソ→ドファラと和音を移動するときでも、指の広げ具合や指使いが感覚で分かる。鍵盤に目を落とさずピアノを弾くことは、将来子どもの前に立つ保育者たちにとって、子どもの様子を見ながら伴奏したり一緒に歌ったりできる大事な力の一つであると考え。そしてこの感覚を養うには、指の感覚（触覚）のほかにも、今自分はどの音を鳴らしているのか聞き取ること（聴覚）や、手や身体の動かしかた（運動感覚）も同時に敏感に感じ取る必要がある。

大阪音楽大学のクラウディオ・ソアレス氏による「音の循環」がある（右下図）。それによるとピアノを弾いているとき、音は常に〔①楽譜に書いてある情報が目に入る→②目から入ってきた情報を理解する→③作曲家がほしかったのは、どんな音かを想像する→④想像した音を出すために必要な動きをする→⑤楽器の状態が良いかどうか→⑥ピアノから出た音を耳が確認する〕の流れで循環している。この循環が分かっていると、良い練習ができるそうである。先程の後

者の学生は、その循環がうまくいっておらず、①と②の視覚の部分だけでピアノを弾いている可能性が高い。頭で考えたり音を聴いたりせずに目に頼った弾き方では、練習していてもなかなか曲に慣れず上達しないのである。前週に合格した課題曲が翌週には譜読み段階まで戻り弾けなくなっていたり、前回の曲で学んだ弾き方を次の曲で生かしきれなかったりする学生は多く、それもやはり音がうまく循環されずにピアノを弾いてしまっているところに原因があるかもしれない。

以上のことから、今回の鍵盤に慣れることを目的とした鍵盤遊びは、「鍵盤感覚」と「音の循環」をポイントにして進めることとした。

### 【音の循環】



## II 実践

2019年前期の授業では、以下の1)～10)の鍵盤遊びを授業の導入に取り入れた。方法および様子をまとめている。

### 1) 鍵盤数え：ピアノの白鍵、黒鍵全て数える

I-2でも触れたが、大人になってからピアノを始めると、目の前の楽譜に集中してしまい、ピアノという楽器そのものに初めから興味をもちにくい。鍵盤の数を数えて数えようとする大人は少ないと思っている。今回授業で数える前に「88鍵」と知っていた学生は、12人中1人であった。

ピアノは、初期のものから繰り返し改良されて現在の大きさや形となっている。その歴史を踏まえた上で、ピアノがどれだけの音域をもち、普段弾かない低音



や高音を全部弾いて耳で確かめることを目的として1)を行った。

学生のたてた予想では、50 鍵～70 鍵程度が多かった。グループの代表者が一音ずつ弾き、皆で声をそろえてカウントする。最初はニコニコしながらカウントし出したが、70 鍵過ぎた辺りで学生たちが真剣な表情になる。88 鍵と分かり、予想に反し思った以上に鍵盤があることで、驚く学生たちの姿が印象的であった。

2) 真ん中はどこ：鍵盤の両端から同時に数えていき、鍵盤のちょうど真ん中を捉える

鍵盤全体を視覚的に捉えることを目的として行った。瞬時に予想させると、見当外れな場所を指す学生はおらず、皆惜しいところを指していた。意外なことに、よく小さな子が教わる、いわゆる「真ん中のド」と呼ばれる場所を指す学生もいなかった。

二人の学生が、最高音と最低音から同時に一音ずつ弾いてカウントしていく。ここで重要なのが、二人息を合わせることである。テンポを決め、どちらかが「せーの」と掛け声を発し、阿吽の呼吸で鍵盤を数えていく。目で指先を追いながらも、耳で音を聞きながら、また時には横目で相方をちらっと確認しながら、音を揃えようと協力し合う学生の姿があった。

3) ドはいくつ：鍵盤上のドを全て探し、皆で同時に鳴らす

ドの数を確認することで、ピアノがもつオクターブの数=7オクターブを把握し、倍音の響きを体感させた。一人だと全てのドを鳴らすことはできないが、2～3人いればできる。電子ピアノではなかなか体感できない倍音の響きも、グランドピアノを使って蓋を開けると聴きやすい。日頃学生たちが使うピアノは、電子ピアノやアップライトピアノがほとんどなので、それらと違うグランドピアノの響きや鍵盤の重さに気付き、感心していた学生もいた。

4) ドたたき：鍵盤にあるドを低音から高音へ、高音から低音へ順に素早く見つけて鳴らす

これも鍵盤を視覚的に捉えるための第一歩として行った。ドの場所は黒鍵がヒントになる。ぱっと見て黒鍵が二つと三つのグループに見えれば、二つのグループのほうの左黒鍵の左下がドである。ミスなく、なるべく速く音を鳴らすということで、学生たちは瞬間的に集中力を要したが、同時にゲーム感覚で楽しめていた。

ドが素早く見つけられることで、曲の練習中に弾いている音域から1オクターブ上や下へのポジション移動に迷いがあった学生も、以前よりスムーズに動かせるようになった。

5) 瞑弾：目を瞑ってハ長調の音階を弾く

これまでの遊びは視覚優位だったが、これは視覚以外の感覚—聴覚、触覚を頼りにしたものである。まずはハ長調の音階を弾くために指の運び方を練習し、慣れてきたら目を瞑る。とは言っても学生たちは、今まで頼りにしてきた視覚を急に閉ざされるので、抵抗感をもち、なかなか率先してやろうとしなかった。「間違えることが嫌だ」という。そこで、グループ内の瞑弾したことのある学生に代表で弾いてもらおうと、「凄い！」と拍手が起こった。

一度瞑弾を目の当たりにすると他の学生もイメージが沸くのか、曲の練習中で「ちょっと目を瞑って音をよく聴きながら弾いてみようか」という提案に対し、すんなり受け入れることができる学生が増えた。

6) 音階つなぎ：3～4人で一台のピアノを使って、ハ長調の音階をなめらかにつなげて弾く

これは、5) でハ長調の音階が弾けるようになったこと、聴覚を意識することの続きとして行った。音階をなめらかにつなげるためには、シ～ドの受け渡しが重要となる。学生はグループで相談しながら、誰がどの場所で弾くのか、

初心者は1オクターブのみ弾く、などを決め、誰もが途切れないように慎重に弾いていた。7オクターブが上手くつながると、満足げな顔をする学生もいた。

音の聴き方に集中できるようになると、学生たちはいざ曲に入ったときに途切れながら弾いていたフレーズをどうしたらつながられるか、意識して練習できるように感じたように感じた。

7) いろんな音色で音階：感情を表す言葉をイメージしてハ長調の音階を弾く

曲を練習していると、音を間違えないように正確に弾くことだけに気を取られて肝心の気持ちがついていけない弾き方をしてしまう学生も少なくない。そのため、感情表現の部分を大事して弾くことをねらいとしてこれを行った。

提示しやすい表情として、「喜怒哀楽」をテーマにした。表出の差はあったが、どの学生もイメージした感情で音階が弾けるように、明るくはっきりめに弾いたり弱々しく弾いたり、弾き方を変えていた。その中である一人の不器用な学生が、イメージ通りの音に近づけたことですっきりしたのか、これを行った後とても前向きな姿勢で曲の練習に臨んでいたことが心に残っている。

8) 和音の高さ当て：教師が弾いたドミソの和音が、どの音域のものかを当てて弾く

音感を頼りにするゲームで、これも目的は聴覚を働かせるために行った。弾いた音を当てるのではなく、和音の高さを当てることに絞った。3)・4)・6)で7オクターブの音を聴いたり弾いたりしているので、音の高さが想像しやすいように見受けられた。教師が和音を一度鳴らしてから「いちにのさん、はい」の合図で皆がそれぞれの鍵盤で鳴らすまで10秒ほど間があったことから、当てずっぽうでなく、聴いてから音の高さをきちんと想像して場所を探し当てていた。

9) リズムまね：教師が弾く単音または和音のリズムを真似して弾く

耳で捉えたリズムを表現する遊びで、初心者の学生は楽譜上でリズムを正確

に読み取ることが苦手だったり、不器用な学生は手拍子ではリズムをとれていてもピアノを使うと上手くとれなかったりするので、聴覚や運動機能を主に活用する目的で行った。

まねっこ遊び自体は幼児期からの遊びであるので、学生たちも童心に返って面白そうに微笑みながら行っていた。曲の練習中も、特に付点リズムやシンクペーションを正確に体感するときこれをを行うと良いと感じた。

10) メロディーしりとり：教師が弾く短いメロディーの終わりの音からメロディーを作りつなげて弾く

音をドミソの三音に絞って、教師→学生A→教師→学生B→教師…という順で行った。最初は戸惑いがみられた学生もいたが、自分のところで途切れないように頑張っていた。受け渡された音とは違う音を最初に鳴らす学生もいたが、音を出した瞬間違うと分かりすぐに修正できていた。音を限定したおかげでどの音から始めるのか見つけやすかった反面、メロディーを作り出すのに制限がかり少し難しさもみられた。最後までメロディーが繋がると、全部つながられた達成感がグループの中に広がったようだった。

### III 考察と課題

実践を終えて、今回の鍵盤遊びは学生が親しみやすく鍵盤に慣れるために有効なものであったか考察した。

まず前期終了後、鍵盤遊びについて学生からは次のような感想が寄せられた。

### 【感想】

- ・鍵盤の数を知らなかったので、知れてよかった。音階つなぎも楽しかった。
- ・メロディーしりとりが楽しかった。
- ・メロディーしりとりは、瞬間的に音を考えて出さないとイケなくて、結構忙しかったけれど楽しかったです。
- ・メロディーしりとりは初めてやってみただけ、よく耳を澄ませたり自分でリズムを考えたりすることが楽しかった。
- ・自分の知らないピアノの知識を知ることができた。
- ・ピアノを弾き歌うだけじゃなくて楽しかった。
- ・ただ弾く以外にも楽しみ方があると知ったので、色々な楽しみ方を自分でも探して、弾き疲れたときに遊んでリフレッシュしたいなと思いました。
- ・結構難しかったのもあったけど、できると楽しかった。

これらを読むと、今回行った鍵盤遊びに対する学生の感想は楽しかったという声が多く、楽曲の練習以外の方向からピアノに触れて楽しむことは成功した。「弾き疲れたときに行きたい」という感想をもつ学生がいたことから、ピアノを使ってできる遊びの提供ができたことは良かったように思う。また、IIの実践の様子で、様々な感覚を使って楽しみながらピアノと遊ぶ学生の姿が多く見受けられたことから、曲を練習する前に導入として鍵盤遊びを扱ったことは、リラックスした状態を作り出すことに役立つものであったと感じている。遊びなので、もし間違えても落ち込まずに笑ってやり直せたり、グループで楽しみを分かち合えたことで、学生同士の良い雰囲気づくりになったりしたこともまた良かった。

また、実践を振り返って今回の鍵盤遊びがその時だけの楽しい遊びでなく、学生にとって大事な時間になったと筆者が感じたことがある。例えば、実践1) 鍵盤数えでは、こちらから言えば簡単に済んでしまう鍵盤数を取って数えさせ

たことで、学生たちは翌週、その翌週になっても全員が忘れずに数を覚えており、見聞きしたことよりも実際の体験が記憶に残りやすいことを目の当たりにした。実践7)のいろいろな音色で音階では、ピアノを通して自分の気持ちを音に表すことは、学生たちの「表現したい」という気持ちの部分を刺激でき、練習している曲を自分でどう表したいか考えてやってみたいとする切り口となった。

次に、学生には再度ピアノに関する意識調査を行い、鍵盤遊びを取り入れた授業を行ってピアノに対する気持ちはどう変わったか、また練習量での変化はあったかを4月のものと比較し読み取った。

**【調査結果】**

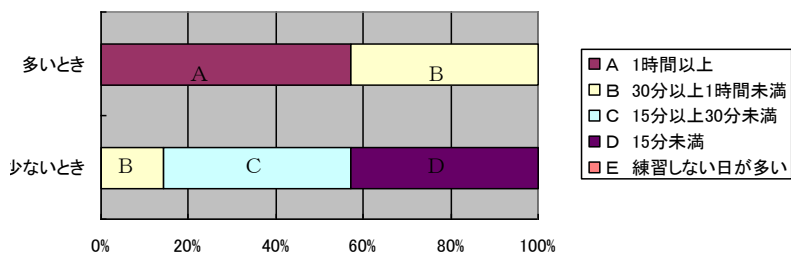
(1) ピアノを弾くことに対する気持ち

とても好き 8人 / やや好き 6人 / どちらでもない 0人 /  
 やや苦手 0人 / とても苦手 0人

(2) ピアノを弾き歌いすることに対する気持ち

とても好き 3人 / やや好き 6人 / どちらでもない 1人 /  
 やや苦手 3人 / とても苦手 1人

(3) 一日に向かう練習量



調査結果 (1) から、ピアノを弾くことを苦手と思う学生がいなくなったことが分かる。また、調査結果 (2) から、前回よりも弾き歌いが好きと思う学生が若干増えている。個別の感想を読むと、鍵盤慣れに対する記述は「前よりもピアノのコツがつかめてきたから」「前は歌いながら弾くことが難しかったけど、ずっと練習して弾けるようになってきて楽しかった」「前よりも弾けるようになって、嬉しい気持ちを知ったから」などがあり、鍵盤遊びを取り入れた半年間の授業によって、当初の鍵盤に不慣れな困り感を訴える学生はいなくなった。

調査結果 (3) からは、少ないときの練習時間はほとんどの学生が 15 分前後ということで、前回の結果よりも全体的に短くなっていたが、多いときの練習時間のほうは全員が 30 分以上であり、一週間で練習しない日のほうが多いという学生はいなくなったことが分かる。筆者は、学生が鍵盤に慣れた分、譜読みもスムーズにいくようになったことが練習時間短縮につながったのではないかと推測する。

今回の鍵盤遊びは、ピアノ初級者が保育現場で弾き歌う力と、幼児の様子を見ながらピアノを弾く力を導くために、少しでも早く鍵盤に指を慣れさせることを目的として行ったが、今後の可能性として、学生たちからの評価が最も高かった実践 10) メロディーしりとりに注目したい。頭の中で考えた自分の音楽を瞬時に外へ表す「即興力」を必要とする鍵盤遊びは、難しさもありながら筆者の思いのほか学生に響いたものだった。これを工夫、発展させていくことで、保育現場において保育者が、楽譜がなくてもピアノを使って幼児の動きに合わせて即興でメロディーをつけたり伴奏したりする力を養っていけそうである。そういった柔軟な力は、幼児の感性を育てていく上でとても大事ではないだろうか。従って「即興力」を今後の課題とし、引き続き授業では鍵盤遊びを取り入れていきたいと思う。

## IV おわりに

本稿では、ピアノ初級者のための鍵盤遊びを授業の導入に取り入れた、本学における筆者の実践について述べてきた。

本実践ではピアノ初級者の学生が堅苦しさをなく、楽しんでピアノに触れる時間をもつことができ、様々な遊びによって鍵盤感覚を磨きながら鍵盤に指を慣らす良い機会となった。なかでも、自分の感じたことや考えたことをピアノで表現できるような遊びは、特に記憶に残り、曲を自分なりに表現していくための大事な力となることが分かった。さらに、鍵盤遊びには保育者が園において幼児との音楽遊び、ピアノ遊びに役立つ「即興力」を養える可能性もある。

これからも学生たちがピアノを弾くことが楽しいと感じられる授業づくりをしていくとともに、卒業後に学生が自信をもって保育現場へ出て行けるような確かな技術を育てていきたい。

### 参考文献

クラウディオ・ソアレス

「音の循環」

『ムジカノーヴァ』 p4-5 p14-19 音楽之友社、2014年6月

田中（貴邑）富久子

「レッスンに生かす男女差」

『ムジカノーヴァ』 p 66-69 音楽之友社、2009年4月

佐藤雄紀

「保育者養成校におけるアクティブ・ラーニングを用いたピアノレッスン及び幼児に対する音楽表現指導法に関する一考察」

『信州豊南短期大学紀要』 p224-250、2017年



大村典子 大崎妙子

『大人のピアノ 長続きのコツ』 p14-27 p36-69 ヤマハミュージックメディア、  
1997年

「音楽を読む本」編集委員会

『ピアノを読む本 もっと知りたいピアノのはなし』

ヤマハミュージックメディア、1994年

足立博

『まるごとピアノの本』 p10-66 青弓社、2002年

猪之良高明

『はじめようピアノで音楽療法』 p134-207、2001年

樹原涼子

『プレ・ピアノランド①』

『プレ・ピアノランド②』

『プレ・ピアノランド③』

『ピアノランド①』 音楽之友社、1991年

